

平成 20 年 5 月 28 日

19:00～21:00

前原暫定集会施設 B 会議室

## 第 8 回（仮称）小金井市芸術文化振興計画策定委員会

### 〔議事録〕

#### 次第

1. 前回の議論の確認、今回の配布資料の説明
2. 計画の内容（「文化から遠い人」）についての議論
3. 市民講座の準備状況について
4. その他

#### <資料>

1. 「これまで出てきた意見」（第 2 版）
2. 市民講座ニュースレター

#### 〔計画策定委員〕

- ・ 大久保広晴委員 =出席
- ・ 大澤国栄委員 =出席
- ・ 久保みどり副委員長 =出席
- ・ 池口葉子委員 =出席
- ・ 田川尚子委員 =出席
- ・ 中野昌子委員 =出席
- ・ 増田章夫委員 =出席
- ・ 斎藤浩委員 =出席
- ・ 田中敬文委員長 =出席
- ・ 久保田美穂委員 =出席

#### 〔事務局〕

- ・ コミュニティ文化課文化推進係長
- ・ 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻小林真理研究室

〔傍聴者〕 なし

## 1. 前回の議論の確認、今回の配布資料の説明

### 久保副委員長

それでは第8回策定委員会を始めます。まず事務局から配布資料の説明をお願いします。

<資料1 P1～3説明>

### 田中委員長

資料1の上部にA, B, C, Dと書いてあるが、これは発言者を意味しているわけではないのですね。

### 事務局（中村）

ではないです。問題を共有していく過程で表の場所に名前がないと作業がやりにくいのでA, B, C…、横には①, ②, ③…を便宜上振らせていただきました。

### 田中委員長

2ページのAと4ページのAに関係はないのですか？

### 事務局（中村）

ないです。そうしたまとめ方をするといいのですが、今回はしていないので次回までの宿題にさせてください。前回の内容確認について他に何かありませんか。

無ければ今日の説明に入らせていただきます。「今日は文化から遠い人」ということとお話させていただきたいのですが、なぜ「文化から遠い人」という分類をしたかという、これまでのみなさんの意見を整理していて、アクセスしにくい人への配慮のようなものがすごく沢山出てきたように思って、それらを一つの論点としてまとめたときに「文化から遠い人」という名前をつけました。これまでの意見については表に落としてあるのですが、まず全般的なことを考えたときに問題点として、サイレントマイノリティのための芸術文化、多様性の確保、行政がやる以上参加できない人、しない人への配慮も必要ではないか、といった意見が出てきたと思います。それにたいして解決策として、アイデアを出してもらうといったこと。そうした効果や課題についてもまとめてあります。

縦の項目に沿って説明していきたいと思います。アンケートに答えなかった方にも配慮するという意見も前々回出されていたと思います。予想される効果の欄にありますが、関心の無い人も活動後にアンケートを取れば別の結果が出るかもしれない、そうしたことを考えたときに優待制度など有効かもしれない。無関心な人をどうするかということも大切だということがこれまでの議論で展開されたと思います。そうしたことをふまえて、表のそこから下の部分は子ども、高齢者、世代間、男女など誰がアクセスしにくい。実際に文

化から遠い人は誰なのか、こういう人が遠いのではないかという、「人」に沿って表をまとめています。子どもの問題なら学校の先生と教育委員会の連携が必要だ、ということにも触れています。高齢者については、高齢者は人生の先輩として良きアドバイザーにもなれる存在です。介護だけの生活で遠くに行きにくいという人達も多くいらっしゃいますから、そうした人達のことをどう考えるか。そうした人たちも入ってくることで私達も豊かになれるような形を考えていくことが大切なのではないか、といった問題提起が前回までになされました。子どもと高齢者をばらばらに考えるのではなくて、子どもから大人まで巻き込むような形、子どもとお年寄りもつながるような形も大切だと指摘されていたのですが、世代間、世代内の交流。逆に世代別の場を設けて時間を大切にするという意見も出されていたと思います。

ここまでは時間軸、縦の話で、誰が一番アクセスしにくいかを考えた話だと思うのですが、それとは別に性別に注目したときに男性というのは、実はすごく遠いのではないかという意見が前回指摘されていたと思います。そうしたこれまで出てきた意見以外にもアクセスしにくい人がいるのではということも今日は議論して頂きたいと思います。

これまで出てきた意見は表の通りなのですが、「よりよく生きるための福祉としての文化」という項目をこちらでつけたのかということの説明だけ事務局からさせていただきます。文化から遠い人、不自由な思いをしている人がいないよう、寂しい思いをしている人がいないようにするといったときに、「芸術文化で豊かな暮らし」というのがこの計画の目標だと思うのですが、豊かな暮らしのためには芸術文化も必要だということをやっと出していく必要があるのではないかと思います。よりよく生きるために必要なものを届けるアクセスが機能する、不自由な思いや寂しい思いをさせないようにする。そういった広い意味の「福祉」に芸術も含めて考えるという意味で、「福祉としての文化」という言葉を用いました。「福祉としての文化」として分かりやすい例でご紹介したいのは、茨城県の話なのですが、「いばらき子育て家庭優待制度」というのがあって、メンバーが「キッズクラブ」というカードを見せると料金割引等が受けられるという子育て支援政策なのですが、その中に美術館等で団体割引も適用するという内容が入っていたのです。福祉として、「生活に必要なもの」といったときに芸術文化のことも考えてみるということを大切にしたいと思い、ここでは普通の使い方とは違うのですが、あえて「福祉としての文化」という言葉を入れさせていただいています。

以上が資料の説明です。これまでの意見については資料に反映させていただいておりますので、まずはこちらを確認していただいて、漏れが無いのか、あるいは大事なことがあるのではないかと、言うことを確認していただきたい。ここに出ている以外にも文化から遠くて寂しい思いをしている人がいるのではないかと、言うことを考えていただきたい。それは私達よりも実際に小金井に暮らすみなさんのほうが想いを馳せやすいと思うので、是非みなさんのご意見をお聞きしたいということがあります。それから、なぜ文化から遠ざかっているのか、どうしてそういう人が出てしまったのか、原因についても考えていただきたい

くて、そうならないためにはどうしたらいいかという解決策も思いつくのではないかと思うので一歩先まですすめて考えていただきたいということがあります。

もう一点、これまでの議論ですと高齢者なら老人ホーム、こどもなら学校といった、場所ですらえて対応する解決策の提案が多かったと思うのですが、ほんとうにそれだけで十分か。もっと多様なケースあるのではないか。場所ですらえて大丈夫かどうかについても、もう一度お考えいただければと思います。何か補足はありませんか。

### 事務局（佐藤）

繰り返しになりますが、「より良く生きるための福祉としての文化」という言葉を使いましたが、これは普通に使っている「福祉」よりももっと広く捉えたい、という気持ちでこの言葉を使いました。というのは、話の中でサイレントマイノリティーと言う言葉を使って、声にもなっていないが、ある瞬間は文化活動に参加しにくくなる人の声をどう拾えばいいのかというところ。アンケートのなかでも無関心な人をどう考えていくかという話もあったのですが、無関心な人はもしかすると文化活動に参加しなくても幸せに過ごしている可能性はあるのですが、一方で文化活動に入ろうとした瞬間にすごく不自由になる、アクセスしにくくなる可能性もあると考えたときに、急に文化活動に参加するための福祉的な施策が必要になる。こうした意味で「文化から遠い人」、「よりよく生きるための福祉としての文化」は広い概念で捉えてほしいという意味でこの言葉を使いました。

### 事務局（小林）

事務局でこの委員会の準備をしているときにいつも言うことですが、現在、医療技術、介護など一般的に言う福祉は、高齢者医療制度の問題などで揺らいでいる部分があったとしても、日本の社会では充実していて、健康で身体的に長生きできるようになっています。しかしながら長く生きられる人が、本当に生きがいを持って、充実感を持って生きているかというところではない部分もあります。私はある地域で、長生きしている人が「長く生きているとかえって迷惑かけるから早く死にたい。どうすればいいか。」とお医者さんに尋ねる高齢者の人がいるということを知ったことがあります。それはやはりすごく不幸な社会だと思っています。芸術文化は、そのような人達に新たな生きがいを提供すると思います。そういう視点から考えていくと、福祉としての文化という発想は重要ではないかと思っています。

もうひとつ言わせていただくと、今、効率とか競争とかを中心に社会が回っている。それがさも一番大事な価値観だという風に社会が回っていると思うのですが、そういう人達も含めて、文化のような「ゆるゆるしたものも大事」と思ってもらうことも大事だと思っています。考えてもない人に考えてもらうだけでも、競争や効率ばかり言っている状況が変わるのではないかと思うのです。そのときに「文化はただの贅沢品」と思っているだけではだめなのかなと思います。文化や芸術、芸術が中心なのですが、それらをこういう面

でもとらえてもらいたいと思ってこの枠組みにしてみました。

#### **事務局（中村）**

事務局の説明としては以上です。改めて名前をつけると、こういう名前を今回つけましたが、みなさんこれまでの話し合いで考えてこられたことだと思うのです。この計画に当たってはみ出す人がいないように、ということは。なのでそのことをこの場で改めて丁寧に確認していきたいということです。事務局からは以上です。

#### **久保副委員長**

有難うございました。ではそれぞれのテーブルで今のことについて話し合いたいと思うのですが、まず一点目に問題に漏れないか、二点目に解決策が十分に出されているか、三点目にこの解決策で問題が解決できるのかということを中心に、グループ分けをします。

#### **田中委員長**

グループ分けする前にひとつ確認しておきたいことがあります。今までの議論をまとめていただいたのはありがたいのですが、「より良く生きるための福祉としての文化」については、我々は一度も議論していないと思います。事務局には色々とお説明いただきましたが、一度も議論していないことが議題に入って、これをもとに進めていくにことは、私は違和感があるのですが。

#### **事務局（小林）**

それも含めてグループでお話いただきたいと思います。

#### **田中委員長**

しかしこれは左側の軸とは違い、右側のタイトルに書いてあるので、きちんと最初に話したほうが良いと思うのですが。

#### **増田委員**

全体で？

#### **田中委員長**

はい。ちょうど今までのおさらいにもなるし。いきなり分けると細かくなりすぎてしまうのでは。

#### **大久保委員**

私も「福祉」という言葉が、全体にかかってくる部分で理解できていないところがあるので、言葉について。やはり福祉と言うと、表の中では高齢者と結びつきやすいが、それが

他の部分や全体にかかってしまうのはなぜかという気持ちがあるので、もう少し何か例を挙げて説明していただけませんか。なぜこの言葉を使ったのか。

#### **事務局（小林）**

事務局で話し合ったときに、文化とか芸術は今まで、好きな人ややりたい人はアクセスしてくるし、やりたい人を掘り起こすという発想は出てきたと思います。しかし「福祉」といったとき、例えば高齢者になって、介護を受けるかもしれないし、受けないでいられるかもしれないが、誰にでも関わってくる問題として想定されます。文化芸術も全員にかかってくる問題として捉えたいのです。福祉という言葉をあえて使ったのは、反対に福祉という言葉が今限定的に使われているのではないかという問題意識なのです。福祉を辞書で調べると「幸せ」となっています。幸せを実現するために介護や医療が必要だという、実際の施策が福祉になってしまっています。本来は「より充実した生き方」が福祉になってくると思うので、ここで福祉が適切でなければ皆さんの言いかたで変えていただいて構わないと思っています。取りまとめのときにつけた言葉に過ぎないので、こういう言葉がいいのではというのであれば、むしろそれを出していただくと嬉しく思います。

#### **田中委員長**

小林先生の今のお話なら、「福祉」という言葉はいらないわけです。「よりよく生きるための文化」という形で広く使えばいいので。小林先生の話の話を聞いていると、そういう面もあるのかと思います。福祉という言葉を使うと、例えば我々がシンポジウムやパネルディスカッション、ワークショップなど外へ出て説明するときに、今のような話ではやりにくいですね。みんな福祉という言葉はそんな使い方をしているので。環境関係の人は、環境としての文化、まちづくりの人はまちづくりとしての文化といたりしますから、どうしてもそういう対応をされてしまうのです。ですから、福祉という言葉が本来の意味で使われるということを皆さんがご存知であればいいのかも知れませんが、福祉というと、何々福祉、児童福祉、老人福祉といった使われ方を見ますと、私はこの言葉はむしろ使わないほうがいい。また福祉としての文化といいますと、今日本の政府は毎年2200億円福祉関係のお金を削るということを言っているのです。なので文化を福祉に含めると、普通の人の感覚では文化も2200億円のなかに入ってしまう。福祉とは重なる部分もあるし、広い意味ではそういう使い方もあるかもしれないが、やはり文化は文化で議論したほうが、私はやりやすいと思います。

#### **久保副委員長**

増田委員。

#### **増田委員**

私の所属している小金井の文化協会の一つのキャッチフレーズは「芸術文化はこころの福祉」。生きる糧、どちらかというところの福祉であるというキャッチフレーズでやってきた。10年近く携わった芸術文化に関心のある人は元気です。それは間違いない。病気になる率も低いような気もするし、逆に脳梗塞やった人が非常に甦ってくるケースは何度も見ました。特に彫刻は指先を使うのでリハビリ効果もあったりして。これはちょっと違うかもしれませんが。全体としては「こころの福祉」という捉え方ではできるかなと思います。いまでもうちの会のキャッチフレーズになっていますので、まったく福祉とは関係なくは無いと。

#### **田中委員長**

関係なくは無いけれど、福祉という言葉でまとめると狭くなりませんか。今の話だって高齢者ですよ。

#### **増田委員**

実際多いので。なかなか現役の若い人は我々の文化協会のような地元で活動するのは比較的少ない。世代の問題はあるのですが、生きがいという意味では「こころの福祉」という捉え方は出来るような気がします。

#### **池口委員**

私は田中先生と同じ感想を持ちました。こういう風に書かれると、逆に狭い福祉という感覚を受けてしまって、個別の細かい部分に福祉的ニュアンスを入れるならいいかなと。おっしゃったとおり、よりよく生きる、幸せに生きるということなので、私には福祉という言葉がダブってしまう。このリズムにもちょっと違和感を覚えました。

#### **久保副委員長**

私はニュアンス的には伝わったのですが。

#### **池口委員**

もちろんニュアンスは伝わりましたよ。

#### **久保副委員長**

また田中委員長のご意見ももつともだだと思います。またアンケートに答えなかった方などのことを考えると、福祉という言葉は納得ではないかと思いますが、今回は抜くというのはどうですか。これについてもう一度話し合いたいと思いますので。今回は「福祉として」を抜いて、「よりよく生きるための文化」ということで進めていきたいと思います。前回はお一人ずつお話いただく時間を持ったのですが、今回はグループで議論していただ

きたいので、15分くらいお話をしていただきたいと思います。

<グループディスカッション>

## 2. 計画の内容（「文化から遠い人」）についての議論

### 久保副委員長

では増田委員のところからいきます。

### 斎藤委員

求められている議論とは違う議論になったかもしれないが、意図するところを汲んでいただいて、またまとめていただければと。左側の「文化から遠い人」のなかで抜けが無いかということ。子どもさん、高齢者など年齢の問題、身体的なハンデキャップということがあるのですが、たぶん一番遠い人は働いているお父さんではないか。朝電車に乗って出かけ、夜は会社の人と一杯飲んで帰ってきてそのままお風呂入って寝てしまう。家族と話すことも無い。家族の教育費と食費を稼いでこないとどうしようもないということで、お父さんたちはそういう意味では一番遠いのではないかと。お父さんたちを含めて、そういう人達をどう考えたらいいのか、ということで議論は非常に大きなところへ飛んでしまったのです。

大きく括ってしまうと人生の価値観みたいなものがベースになるのだろう。先ほど先生がおっしゃったように、今までの日本の効率第一主義、金銭的な価値が唯一、というような時間、スピードが非常に速く、効率的にお金を稼いで、というのが今の日本の唯一の価値観。それもこれだけの大規模店ができて、コンピューターで何でも出来て、それもやろうと思えばいつでも何でも出来る。個人の手には余ってしまって、みんなどこをやればいいのか分からなくなってしまっている。一般の父ちゃん母ちゃんの商売はみんなパンクしてしまっていて、子どもの出来がよければみんな会社行ってくれ、自分は店閉めよう。こういう中で生き方の自信がなくなったり、このあとどうやっていけばいいのかという軸がなくなってきていて、3万人ぐらいの自殺者がでる。どういう風に生きるのが人間としていいのか。今まで一生懸命働けば家族を豊かにして、食べられてという価値観がだいぶ崩れてきてしまっている。それをもう少しゆっくり、もう少しご飯の量少なくても豊かな感じになれるとか。気持ち的に人と人とのつながりをもう少し大事に出来るとか。お父さんは子どものために働いているが帰ってくると子どもは寝ているとか。子どものために働いているんだけど、子どもは全然お父さんと遊んだことないとかね。それが本当に幸せなのだろうかということがベースにあって、しかしそれは今すぐ変えるのは無理だが、そこに疑問点や問題提起をするような投げかけや解決策をやっていくことによって、だんだんと世の中や意識が変わっていくような。こころの豊かさもお父さんも含め、お母さんも「稼げ、稼げ」だけではなくて「少しは残業代減ってもいいから、日曜日は家に居て家族で過ごそ



うよ」とか。そういうところにもっていけるような投げかけを文化などを含めて。それをやれるのは文化だったり、小金井の豊かな公園だったりする。小金井公園に家族みんなで行こうよと。ディズニーランド行くとお金がたくさんかかって「残業してこい」ということになるが、「みんなで小金井公園でバーベキューやろうよ」と言うのなら「まあいっか」という。お金がかかったり効率を求めたりというところではない時間の過ごし方を小金井の中でつくることによって気持ちが豊かになる。色んなところで話しているのは、今までは足し算。これもあれもやってみよう、というどんどん商売も大きく、付け加えていって、来てもらうためには駐車場つくったりして。どんどん足し算をしてきたがそれも限界に来ている。これからはなにもやらない、引き算をしていく。何もしない場をつくってそれを楽しんでもらう場を提供したり、それでよしとする気持ちの土台をつくっていくのが大事ではないかという意見もあり。なかなかそこまでは悟りきれず日々あたふたやっているのですが。商売をみているとそういう方向にいかないと、そのうちつんじょうかなあと。3万1人目になってはいけないので、あるところでよしとしよう、それで楽しんでいく。逆に時間をつくって入っていける場があれば、そこで家族と過ごしたりというのが、いろんな趣味のところだったり、小金井公園という場所だったり。そういう面でいえば、この街は非常に受け入れる素地はあると思います。

#### **久保副委員長**

有難うございます。では次よろしいですか。

#### **田中委員長**

表のA~Gのところで抜けている人、子育て中の人。行きたいけど時間が無い、行きたいけどうずうずしている。家にいると、帰ってきた夫に当たるのでは(笑)。関心の無い人をどう対処するかというのは難しい。自分から壁を作って、「俺は芸術文化いらない」とか、そういう人までをどう対処していいか悩んでいます。あと一点、どんな人が行くかという視点のほかに、芸術文化はジャンルがいろいろあり、好みも色々あるので、なかなかうまくマッチするのは難しいかなという話をしていました。若い男性向けという話は、同じような話が出ました。斎藤さんの話の続きで行くと、そういう男性は家に帰って野球を見るぐらいかな。でもそのナイターも視聴率落ちている。サッカーに取って代わられて。そういう意味では見る行為だってずいぶん細分化されているので難しい。補足はありますか？

#### **池口委員**

高齢者は意外と元気。高齢になって健康な人は本当に生き生きとして芸術を享受し、良かったといって最期を迎えられるのだけど、身体的ハンデ、いわゆる障害者という人々の壁は高い、バリアというのかな、ということは言っていました。そこをどうしていくのかということで、まずは情報。情報は大事なことで、それを選択できる自由、選択できる権利

はどうつくっていけばいいか、という話が出ました。疲れているお父さんという話が出ましたが、障害者の話で見ますと、自立支援法というのができて、働くことを最優先という。先ほど効率という話が出ましたが、障害者の世界でもいままでは作業所というところで、豊かに生きることを良しとされてきた人々も、生産性の中に組み込まれないと評価されないという。言い方を換えればそれを「自立だ」とするような制度だと、私は思ってしまう。そういう状況に巻き込まれている障害者の方たちは同じ状況。一生懸命働いて、土日の休みで何をしているかという寝て、リフレッシュするための芸術にはなっていない、というミニヒアリングをしてきたところではそういう意見が出ました。

### 久保副委員長

では最期に大澤委員のグループ。

### 大澤委員

何点か話した中で福祉という言葉についてお話したのですが、疑問があって先ほど中野委員と二人で話していました。福祉というと、お年寄りすべてが「福祉」という言葉に入るのか、増田委員の文化協会のお話の中で、脳梗塞が指先を動かす実践をされているということや、なかなか若い子が、という話があった。若い子は難しいと思うが、興味を誘うように募集するようなことをやらないと、伝統文化はやっていかないといけないだろうし。大久保さんも、いろいろ娯楽がある中でこっちに、仏像や郷土芸能に若者を向かせるのは難しいので、考えていかななくてはいけないと。話は飛ぶのですが、お年よりも、体の不自由な人と一緒にやるのが福祉なのか。今の話ではお年よりも福祉に含まれているのに、かなり元気な方も居る。なのに福祉というと、初心者マークと紅葉マークのように、福祉という言葉聞いたときに、「まだまだ俺たちも若者には負けない」という人も居るかもしれない。以前公聴会でお話したときに、むかしあそびができました。ああいうのをやると、お年寄りは得意げにお話をされて、ヒーローになれるという話が合った。それからうちのお囃子の女の子を一人連れてきたのですが、彼女は緑小で仕事をしているのですが、そこでも授業にお年寄りがきて色々なお話をしてくださるとすごい好評らしいのです。でも学校の先生たちは「授業を犠牲にしてまでそういう時間は大事か」と言われてしまう。福祉というときに、色々なものが入る隙間がないというか。そこをちゃんと話をして隙間に入れるように、実際そっこのほうが大事だと思うのですが、そのような隙間をつくるような計画にしていけないと、いくら話をしていても、全てその段階でなくされてしまうように思うので、しっかり話したいと思います。

### 久保副委員長

では大久保委員。

### 大久保委員

文化から遠い人というところで、挑発的になるのですが、効率的な社会などを作ってきた一つの要因に政治家というのを敢えて挙げて、政治家に文化を教養としてもらう。政治家だったり、効率的な社会を作っている大企業の偉い人などに効率性と違った芸術文化というものをちゃんと知ってもらうことが大切かと。国の方向付けをある程度やる人に、ちゃんと芸術文化の色々な点を知ってもらうと。皆さんも感じていることかもしれませんが、大阪の橋下知事になって、あそこでは小金井市と同じように条例ができて、その後計画ができたのです。しかし一人の政治家の出現によって、条例をまったく無視した色々な削減がされている。これをみると、折角いいものをつくったら、政治家などそれを動かす人達にそれをわかってもらわないといけないと思ったので。

また、先ほど入れない方は難しいと言う話がありましたが、入れない方は、最初は文句を言うが、入ってしまえば…

### 大澤委員

行政としては、何か言われたときの対処法というか、そっちのほうに話し合いが進んでいると思うのです。うまくいえないのですが。

### 久保副委員長

入れない人は難しいと言うのは、みんなで活動している人は楽しんでやっていると。その活動に参加していない人は、活動がうるさいとか言う。しかしそういう人達を連れ出してくると結構楽しめたりするというので、人とのつながりが大切かなということですよ。

### 大澤委員

大久保さんの言われたような、政治家の方に興味を持たせることが必要。本当に心の底からという人は居ないかも知れないが、商店街の行事に関わっている人などいくらでも居るじゃないですか。まずああいう人達に関心をもってもらう。自分の会が入っているところはかわいいだろうから、とか色々ありますから…

### 田中委員長

芸術文化は票にならないのですか？

### 大澤委員

一番じゃないですか。お祭ごととかはなるのでは？

### 増田委員

政治家の方はこちらは向いていますよ。左から右、関係ないですから。だけど我々で誰を応援するとかは持たないようにしています。芸術文化振興に一所懸命な党もありますよね。そういう党もありますが、それだけに利用されても困る。しかしそう関心のある市議員の方は居ないね、小金井には。

#### **久保副委員長**

ちょっと休憩を入れたいと思います。20分から再開します。

<休憩>

#### **久保委員**

今まで3グループに発表していただきましたが、それに対してでも、自分のご意見でもいいので、久保田委員、発言していないので、振らせていただいて。働いているお父さんのことでも。

#### **久保田副委員長**

今ちょっと話していたのは、私は3年生と18になる子供がいるんですけども、個人的にはね、あんまり、もちろん学校の先生すごい一生懸命やってくれてて、毎日子どもが楽しく学校に行ってくればありがたいんだけど、何でもかんでも全部学校がやってくれるというのはむしろおかしな話で、むしろもっと大人とかまわりの大人とか親が、自発的に子どもにそういう機会を与えるっていうことがないと、学校がすべてをそんなまかなってくれていう風に思うのはどうなのかなって、これは、論拠があってというよりは、私が自分で子どもを育ててみてそう思うっていう感じがしますね。で、じゃあなんでっていうと、そのさっきそこで働くお父さん、追いつめられて働くお父さんっていう話になっちゃうんだけど、お父さんとお母さんが家の中にそういうものを持ってくる余裕がないとか、関心がないとか、子どもって例えば美術館とかつれてくとかなんとかっていうことよりも、やっぱりすぐに親のまねをするから、親が何を、何について語り、何を見てっていうのがすごく大きく影響するんじゃないかな、と思ってるんですけどね。うちなんて生き物好きだから、みんなが生き物好きだから、変な生き物がうちの中にいっぱい住んでいて、それはみんな、そういうふうに相乗効果っていうか、(笑いで聞き取れず)お父さん追いつめられちゃって。

#### **斎藤委員**

それが変な生き物だ。(笑い)

#### **久保田委員**

そういう意味では、さっきここで三人で話してみたいな、全体の底上げ、みんなが生きることを楽しむ、というふうなことができるような、もちろんそのための個々の、学校なら学校の役割、役所の役割、大人の役割ってでてくると思うんだけど、でもやっぱり全体がそういうこと、暮らしを楽しむとか生きていくことを楽しむとかっていうふうなね、価値観みたいなものがシェアできるようなことがまず基本にないと、いくら学校でその枠増やしてとか、時間つくってとかいう風にやっても、それがこう実のあるものとして浸透してかないんじゃないかな。だから基本的には、まあなんていうの、さっきちょっとお話ししてたのは、すごく難しい、ここの場で話すのはすごく難しいことになってしまうんだけど、役所がね、芸術文化っていう風にどこまでいうのか、ていうことはあると思うんですよ。芸術文化ってまあ福祉の問題とちょっとまたあれですけど、どう生きるかってこととかなりこう近い問題になってきてしまう種類の問題じゃないかなと思ってるんですけど、どう生きるかっていうことにじゃあ行政がどういう風に介入するのかとか介入していいのということも出てくると思うんですよ。だから、その本当に個人がどう生きるかっていうことの、関心のありようだったり、生き方の体現としてのこう今の社会みたいなものがあるわけなんで、そこんところがもうちょっとさっきのお話じゃないけど、揺らぎながら、ちょっとずつ変わっていくってというような、仕組みなり、ものの出し方なり、仕掛けなりっていうのを考えて行かないと、ただの時間の振り分け、金の振り分けでは、きっとだめかな、なんて、しました。ごめんなさい、なんか後ろ向きで。

#### **斎藤委員**

暗いんです。(笑い)

#### **久保田委員**

明るい顔して。(笑い)

#### **久保副委員長**

難しいですよ。なんかすごい究極の問題になっちゃう。

#### **久保田委員**

でもそういう問題意識がないと、たぶん…あのね、結果としてどういうことが出てくるかということはまた、あるんだけど、根底に、やっぱりどう生きるかっていうことのものがないと、いくら振り分けの話をしてもうどうにもなんないんじゃないのっていう気はしません。

#### **久保副委員長**

各家庭によってそれぞれいろいろだと思うんですけど、何となく国民性とかそういうとこ

ろから、結構日本って明治くらいに芸術がヨーロッパから入ってきた当時って地位の高い人しか触れちゃいけないようなイメージで入ってきたじゃないですか。でも、ヨーロッパの国って、ほんとに子どもから気軽にジープンで美術館に行けるような環境っていうか、そういうものがすごく整っている、そのへんからこう、差が出てきているんじゃないかなって思いがあるので、ほんとに興味のある家庭とか、だったらいいんですけど、そうじゃない人たちをどうしたらいいのか、どうしたらその底上げができるのか、どこをターゲットっていうかね、お父さん、お母さんの世代なのか、子どもなのかとか、すごく深い問題だと思うんですけど、その辺。

#### **田中委員長**

底上げに関しては、学校現場、学校教育はかなりやってると思うんですよ。いちおうあの、回数が多いとは思わないし、全部のジャンルを網羅できるわけではないけど、たとえば学校に演劇が来たりとか、ある学年の中からそっくり中学生なんかはホールに行って聴いたりしますから、少なくとも、ちゃんと小学校中学校不登校じゃなく行った子は、いずれか一通りはいちおうは経験している。家庭がどういう事情であろうと、日本の場合はね。それは小中までよ、少なくとも。

#### **大久保委員**

効果は現れているっていう風に思いますか？

#### **田中委員長**

だからそれは何が効果なのか。

#### **大久保委員**

うん。

#### **久保副委員長**

その先どうなるかですよ。

#### **久保田委員**

だってそのプロセスを経てきたのが私たちで、私たちが、そのあんまり深く芸術文化を日常化してないわけですよ、今ね。私たちのときも、なんかそういうのはありましたよ。

#### **田中委員長**

学校でいろいろあった？

**久保田委員**

あった。

**池口委員**

ただそれはより進んでますよね。私たちの時代って、ごめん。(笑い) わたしは今の子どもたちの方がね、より本物、なんていうかな、ほんとにこう、何を本物とするかって、ごめんなさい、あれなんでちょっとほっといて、やっぱり豊かな、いろんな、こう、ことを接するチャンスっていうのは与えられているとは私は思いますよ。さっきおっしゃったようにね。だから、私たちとはまた全然違うと思う。逆に私たちになると、じゃあ私たちは不幸だったかということ全然そうじゃなくて、(笑い)

**久保田委員**

だから、たぶんすごく違って、

**斎藤委員**

池口さんと私も同じような世代かもわかんないけど。(笑い)

**久保田委員**

あの、なんていうかな、問題は、ほんとに与えられる、

**斎藤委員**

食べるために。(笑い) でも逆にいうと求めたっていうのはあるかな。ないから、求めた部分はある。

**久保田委員**

今の子どもたちは、与えられることにものすごく慣れちゃって、与えられてこうやってザルのように抜けていくんですよ。うちの子とか見てると。(笑い) それは個人的な。(笑い) 局所的な問題ですけども。でもそこから、やっぱり自発性っていうか、どの子にも自発性なんてほんとはあるはずなんで、むしろ、何を与えるかというよりもそこから何が引き出せるかっていうか、子どもの自発性とか創造性みたいなものは、ものを与えれば引き出せるっていう風にはちょっとあんまり思えないんですよ。

**池口委員**

ただ、私はその、チャンスを与えるっていう、知るっていうね、チャンスを与えるっていうことはすごく大事で、やっぱりその今の教育のあり方ね、そういう芸術文化を子どもたち

にっていう視点は大事なんじゃないかってね。

#### 久保田委員

もちろんそれはすごく大事なんだけど、

#### 池口委員

あとは興味の問題とか遺伝子の問題とか、(笑い) やっぱり人間いろんな人がいるから、さっきその、ごめん、興味のない人をいかにね、あたしは意外とそれってぜんぜん無駄な、(笑い) ごめん私が言ったんですが、興味がない人は無理しなくてもいいんですよ。ただ大事なものは、そのひとにちゃんと、情報として公平にね、そうそう、あるかどうかっていうところだけが問題で、そんな底上げしたってそんな人がその気になったときにたまってくれればいいんじゃないかっていう、こんな言葉使って。

#### 久保田委員

ほんとにそれは興味のない人にね、行政がお金を使って、ていうのはね、やっぱりどこにじゃあ意味があるのかっていうのははっきり考えないといけないと思いますよ。

#### 大澤委員

先ほど池口さんにね、何を言いたいのかってわからないまま言われたんだけど、それは今の話で、やる気というか、関心のない人間に、どこまで行政がね、ほんとに関心がなくて、中野さんのね、話なんですけど、話してたんですけど、そこまでしてまでね、ていう人もいるわけですよ。あとはやってみて、ああこういうもののおもしろいものがあったんだっていう風に気がつく人とね、まったくもって何言っても、っていう人もいるわけだから、どこまで行政というのは、その人たちにね、そういう手を差し伸べたりっていう、そこまでしてわかってもらいたくないよってこっちは思うわけですよ。正直言って。あとはその、いろいろ学校のね、学校関係でいろんなところでいろんな芸術文化とかきますけど、何をもってその、やらせるだけじゃなくて、やっぱり意味がなければやらせるだけだったらみんな一通り、経験はしたり見せたりとか、経験したりしてるわけだけど、何も感じなかったり、だから私は自分で今小学校を教えに行ったりとか、授業の中でやっと、取り込んでくれて、教える中で、今までは山車がお祭りなんかで通っても、御神輿が通っても、ああただのお祭りだ、から、あああれはこういう意味があるんだよ、っていう言葉が一言でも聞ければ、それでもう、ね、プラスになってくると。それでそういう気持ちで、やってるんで、です。はい。

#### 久保田委員

だからやり方ですよ。そこに対話があれば、ただ一方的にこうやって見るだけっていうのと、大澤さんがいらっしやってそこでこうやってやりとりをしながらやるっていう、な



にかが行われるっていうのでは、

#### **大澤委員**

だからいま久保さんがいわれるように、ザルのようにね、別に私の子どもでもいましたけど、それをストップさせて、絶対そこで何かを喚起させるような、

#### **久保田委員**

それはやっぱりその人がそこにいるとか、対話があるとか、っていうのにしてこちらからも受ける子どもたちの側からも何かこういう風におこるような。

#### **大澤委員**

意味が違うかもしれないですけど、たとえば厳しくほんとに言える、言ったときにほんとに親から、それ虐待じゃないのとか、そういうことも、ね、そんなんじゃないよってちゃんと説明できてね、そこで今ね、どういう意味でこの、全部抜けてっちゃうっていうね、っていうのはちょっとわからないですけど私も、あの、ちょっと勘違いがあるんですけど、そこではっきりがっと言えると。みんなにこうね、わかってもらいたいなんて思っていないし、全員が全員わかってくれるなんて思ってもないですよ。でもそこで厳しく言って、やっぱり少し引っかかり何かね、自分の気持ちの中でというか。

#### **久保田委員**

だから、私はそれは一つは見せ方の問題？今の、子どもたちの経験の仕方の問題っていうか、あるとき突然、音楽聞きに行くよって行って、その前後にどういう風なフォローがあるのかわかんないけれども、突然行って、みんなでぞろぞろって行って、音楽を聴いてぞろぞろって帰ってきてそれでおしまいっていうよりは、例えば大澤さんがいらっしやって、前後に例えば質疑応答があったり説明があったり対話があったりっていうのでは、違いますよねきっと子どもたちの滲みて行き方とかね。そういうわりと今までは、ほんとにこう、たぶんね何しに行くかわかんなくて行ってると思うんですよ。子どもたちは。ぼーっとね。

#### **斎藤委員**

修学旅行と一緒に。

#### **久保田委員**

使いようだと思う。ほんとに。そこに大澤さんいらっしやっただけでももう全然違うと思うんですよ。だからそういうわりと、やるんだったらそういうきめの細かさみたいなものが必要かなっていう。

**久保副委員長**

委員長何か。

**田中委員長**

今の話聞いて、確かにそうです。今例えば美術館出掛けるとですね、あの黄色い服を着た赤い帽子を着た集団がかならずいるんですよ。そう例えば映画ですね、なんか例えばその華やかな、赤い帽子がものすごい邪魔に（笑い）小さい子みんな並んで、まあ確かに教育効果ではしょうがないと思うんだけど、せめてね、大人の時間もあってもいいかなっていう気もありますし、そういう教育の時間もあってもいいかなって思いますし、やっぱ今ご指摘のようにですね、先生はついて歩いてるだけなのね、もう少し美術館の人でもこれはこういう絵とかね、あとは立ち止まってなんかそういうのがあればいいけど、そうじゃないから、関心のない人はね、もう絵、さーっと走って、もう行っちゃってるのね。で赤い色がばって動いてるの。（笑い）ものすごい邪魔ですよ、これ一度経験して誰か投稿してくれないかなって、先生だからそれができないっていう。だから今おっしゃるのようにやり方なんだけれども、これはでもね、やろうとするとけっこう手間とか、かかりますよ。だから見に行く時間だけじゃ足りないですよ。

**大久保委員**

なんかでもヨーロッパの美術館とかはみんな当たり前のように地べたとかに座って。

**久保田委員**

ねえ、みんな座ってね。

**大久保委員**

話して絵描いたりしてやっていますよ。

**田中委員長**

日本は走ってるんですよ。

**大久保委員**

うん。

**斎藤委員**

それがたぶん日本の国民性なのか、効率化と、時間配分、スピードですよ。ではなくて、もっと手間をかけて、まあお金もかかるかわかんないけど、もっと一つ一つを丁寧にとい

う文化にしないと、だからたぶんこの美術館からじゃあこっこの美術館、って美術の(?)  
ってやると、予算がついて、今日は 5 つの美術館を見てきましょう、ってなる。まあこれ  
はわかんないけど。(笑い)

#### **増田委員**

もう二度とね。

#### **斎藤委員**

どこ行ったか最後はよくわかんなくなった、という、日本じゃなりがちですよ。そうい  
うんではなくて、もっと一つをゆっくり考えるような、考え方にしないと、豊かに、って  
いうと美術館行って、こっち映画見て、こっち行って、一日でじゃあいくつ回れるかみた  
いなね。

#### **田中委員長**

とくに上野はすごいんですよ。一日でみんな回ろうとするから。最後みんなふらふらにな  
ってるの。(笑い) すいません余計な話して。

#### **久保副委員長**

中野委員何かありますか。

#### **中野委員**

さっきも大澤さんとかもお話したんですけれども、やっぱり福祉って言っても幅が広くて、  
もう頭の中で、福祉っていうのもう年寄りの、団体みたいな、あるんで、もう少し易しい  
言葉でね、その福祉を表現したらいいんじゃないかってお話してみたんです。で今田中委  
員長さんがおっしゃったように、学校でもけっこう美術鑑賞だとか、それからこないだわ  
たしもちょっと呼ばれて行ったんですけど、中学校で、オーケストラの 80 人くらいきて、  
その中で、子どもたちに指揮をさせるんですね、何人か。それでその指揮の勉強をさせて  
る風景を見てきましたけど、やっぱり今は、やっぱり芸術文化に対してそういうことを学  
校でも取り入れてるんだなあ、っていうのが分かってきたんです。それと、あと、大澤さ  
んとお話したんですけど、芸術文化といっても幅が広くて、それをみんなを遠い人を引き  
上げるのは、まあこの席で言ってもいいかどうかは分かりませんが、ええ、なかなか難し  
い話ですね。でやっぱり、好きな、興味がある人は自分で探してどんどん行ってくれるし、  
多少興味のない人でも引き上げれば、それに溶け込んでくれるって方もいらっしゃるす  
けど、その程度で、幅広く、皆さんを引き上げるっていうのは難しいなっていうことが、  
そういう風に思いました。

## 久保副委員長

田川委員。

## 田川委員

はい。三人のお話し合いの中で、遠く、遠い人っていうのがジャンルによるんじゃないか、っていうのがあったんですよね。自分の興味のないジャンルはあるし、だから、私の組織の老人クラブでも、あらゆるいろんな分野で、それぞれが活躍してて、必ずしももう統一されてないんですよ。それぞれ好みもあるし、特技もね、得手不得手もあるし、だからそういう意味ではもう、数多くの芸術、例えば芸術ですけども、あります。それで、その発表会として、あるホールを借りて、年二回やるっていう感じで、それからもう一つそれとは違うんですけども、障害者、障害者が遠いんじゃないかっていうことですけど、今は障害者とは言わないって先生がおっしゃってたんですけどね、たまたまうちの近くに障害者センターグリーンピアっていうのがありまして、でうちの四町会っていうのは非常に小学校とか、障害者センターと、連携をとって、いろんなことやってるんですね。その中で、防災訓練とかも全てやりますけども、障害者センターに、絵を教える先生が出入りしていて、ボランティアで。そして毎月見るんですけども、展示されてるんですね、それがもう非常に上手というかね、見るたびに感心してしまうんですね。だから、そういう出前っていうんでしょうかね、そういうことやってるし、また音楽の部門では、ベル…なんていうんですか、何とかベル。

## 事務局

ハンドベル。

## 田川委員

うん、あれも、やってて、発表会もやっているんですね。でそれも普段はほんとになんていうのかな、車椅子の方とか、それから自閉症の方、それからあと、片方が、脳梗塞とか脳溢血で不自由だとか、そういう方たちを、教えたりしてて、それで成果挙げてるんですね。だから、みんなそういう成果挙げたのをなんか発表の場としてやれば十分できるかな、というようなことは思います。

## 久保副委員長

事務局からこういう意見が欲しいとか、なんかありますか。何について意見が欲しいとか。

## 事務局（中村）

今の話合いを後10分くらい私は続けてもいいと思います。

**久保副委員長**

後五分くらい、あと言い残したこと。

**事務局（小林）**

大澤さんに、できればさきほど休憩時間にされていたお話をさせていただければと思います。

**事務局（中村）**

ハープの話を。

**事務局（小林）**

あのお話は、とても重要な問題かと思います。

**大澤委員**

暗いですが、

**増田委員**

顔は明るいから大丈夫ですよ。

**大澤委員**

あの、どういう風に締めたらいいんでしょうか。

**事務局（小林）**

こういうことがあったということで、いいです。

**大澤委員**

いいですか。それでは。興味があるというあれ、です？

**事務局（小林）**

さきほどのお話をそのまましていただければと思います。

**大澤委員**

どっから入ったらいいか、

**事務局（小林）**

大澤さんの家の隣にどのような人が越してきたかというあたりからいかがでしょうか。

## 大澤委員

そうですね、文句の話なんですけど、芸術文化っていつでもですね、いろんな方がいらっしやいまして、あの音楽もね、さっきジャンルに興味があるとかね、その話していいよね、なんですけど、うちのお囃子はもう三十何年自宅で、(?)やってるんですけど、その隣にですね、六畳一間、すみません、練習場がありまして、見学する方がですね、つまり練習場こちらです、と通過してっちゃうくらいのところでやってるんですよ。で、まあ防音設備完璧じゃないんですけど、やってるんですよ。だから練習してるときに、あの、まあ三十年ずっと続けてね、やってきてるんですけど、近所に、ね、ある方が越してきて、でまあすぐうちの前でね、今度ね、みなさんいらしてよく来ていただければよく分かるんですけど、いろいろとこう、うちの練習に対して、こう越してきた当時からいろんなこう、ね、苦情。まあ入ってきた、見学にくる方がいるとみんな大きな音がすると。やだから越してこないからっていうことをさんざん言っていたんですが、たまたま物好きの方が入って、来たと思ったら、けっこうあの、匿名で電話してきたりとか、いろいろこうしてくるんですよ。ね。それでもう、なんでこんなね、音楽がもう何でも嫌いなのかなって、確かに浸透してるんですけど、ただある日からですね、しばらくしてからですね、朝早くから、なんかポロンポロン聞こえたと思ったら、お琴、その奥さんが、やってるんですね。で娘さんも三人女性の方がいるんですけど、娘さんも各自音楽をいろいろやってて、先ほどのポロンポロン、ハーブですか？やったりですね、いろんな出したい放題やってるんですよ。もうね、時間帯によってはその、お琴やったり、ハーブやったり、でも、あの、ね、ジャンルによってはっていうのはまさにその通りなんですけど、お囃子の時間になると、それは私は文句言わないですよ、私も、楽器もね、音楽何でも好きなんで、文句言っちゃいけないと。いう気持ちでね、まあお囃子なんかやってるんですけど。ねえ、それだけ、あっちもね、声でわかってるんです。毎朝挨拶するわけだから。それもお囃子始まるともう、面と向かって言ってくればいいんですけど、電話で言う。今でも、ね、たまに、何かあるんでしょうね、言ってくる日と言ってこない日あるんですけど、(笑い)体調なんですかね？それだけその、芸術文化つつつても、その、やるもののジャンルっていうので、それだけこう、違うのかなっていう風にお話を、まあしました。すいませんなんか。

## 増田委員

いや、まあ、俺も似たような話になっちゃうけど、文化協会の場合いろんな、文化協会の場合幅広く、先ほど言ったいろんなジャンルがそれこそあるわけですよ。でそれぞれ、自分たちでまあ展覧会やったりそれからオーケストラのコンサートやったり、それから日本舞踊大会やったり、いろいろ案内するんだけど、なかなかこれは来てくれないんですよ。自分の会は呼びたがるけれども、自分がね、例えばオーケストラやってる人が日本舞踊を見に行くとかね、日本舞踊の人がオーケストラとか、これなかなかねえ、一緒に活動して

ながらも非常にこう、横の、こう連携っていうのか交流っていうかね、それはなかなか、芸術文化つつつても、一つのものしか興味がない人もいっぱいいますよ。だから、まあなかなかそういう意味じゃね、例えば関心ない人をね、そこへ引き上げたら、ほとんどは全部不可能だなと思ってますよ。だからクラシック一つとっても、中で(?)ですけど、常に3%くらいしかいないんですね。その人たちがリピーターでこう入ってくるんで、まあそう多少ね、あとは子どもが興味もってとかいう人もいれば、逆に興味あった人もなくなっちゃうとかそういうありますけどね、ただそういうのいれると常に3%くらいが、こういう人。でそれ以上を求めようとする、またそれも難しい非常に、部分がありますから。ある面じゃ芸術文化っていうのは実質的にやることなんで、これをまあ行政が関わるから、まあ税金がそういう風に使われるからといってその、それを、公平にできる部分っていうのは先ほど言ったような、いわゆる情報発信することだとか、そういう活動する場をつくる、どうしても行政のやる部分ってそういう風な、限界かなあと。まあこの会入ったときから最初から言ってるんですけども、あの、やっぱり限界は行政がね、どこまで立ち入ってっていうのはあると思いますよ。それよりも、逆にあの、いろんな人を参加させてもらって、参加してもらって、その中から出たアイデアでこうやっていった方がうまくいくケースの方が多いですね。まあ、さっきジャンルの話を(笑い)。

#### **大久保委員**

いいですか。さっき池口委員からも増田さんからもあったんですけども、僕は関心のない人を別に引き上げるのはそんなに全然難しくない、無理とはまったく思ってなくて、それは反論なんですけども、たとえば、うん、その、

#### **池口委員**

無理とは言ってない。

#### **大久保委員**

無理とは言ってない。

#### **池口委員**

難しい、必要性をね、うん、そこまであえて、

#### **大久保委員**

やることがないっていう。

#### **池口委員**

無理とは言ってません。

### 大久保委員

だから僕は、小金井市でも、一つの何か、まあ美術館でも、ホールができるとか、こういのがすごくいいきっかけなんで、ここはほんとは関心がない人を、まあ引きつける、芸術にまったく関心なくても、まあたとえば松本にサイトウキネンのね、フェスティバルができて毎年やることによって、まあまったく、まあああいうところですから松本市内の人とかでも皆さんボランティアで参加したりとか、もっと分かりやすい話だとたとえば、ねえ、野球の球団が札幌に行けばですね、もう何万人集まるなんて絶対考えられなかったんですね、野球そんなに関心がない。けども、そこで、やっぱりそんだけ、それっていうのはやはり関心が、まあ、最初なかった人も、何か方向だけで、それは全然変わるので、それは小金井市にも美術館だったり、ホールができて、そこが毎日満員になるっていうのは、もしくは皆さんがそこへ参加されて、そういう場所みんなが使われるっていうのは、決して、不可能じゃなくって、その方法がやはりあるという風に考えて、いったほうが、それはなんなのか、っていうのはもちろん考えなきゃいけないんですけど、そっちの方向に、まあ目標を置いてやった方がいいのかなあ、とは思いますよ。

### 池口委員

それは賛成。

### 増田委員

賛成ですよ。あの、やっぱり今まで。(笑い)

### 池口委員

私が言ったのは、あえて、関心のない人を、無理して、それを問題視して、やる必要はない、とくはないんじゃないかって。ただ、私が言ったのは、そういう人でも可能性として、必ず芸術は生活を豊かにするっていうことは大前提にみんなが思って、だからいかに情報をそういう人たちに常に、公表できるかっていうところでは、そういう施設をね、有効利用して、その今まで無視、その世界を無視してきた人たちも、否が応でも、こう無視せざるをえないような、仕組みにしていって、そういうことは私も同感なんですよ。

### 大久保委員

無理して何かをするっていうことではないですよ、それは、例えば情報の伝え方が悪いとかそういうことをうまく伝わってないとかで、それはいくら言ってもだめだったらもうその人には、わざわざアプローチしないでいいと思うんじゃないかと、それはアプローチの仕方が悪いだけであって、それはちゃんと、関心がない人でも、一緒に何かできるような方法が考えられるんじゃないかなと思いますけどね。



#### 久保副委員長

関心がないのと、身近にないとか、知らないとか、だからそれを含めて、関心のない人になってしまっている部分もあるかと思ますよね。

#### 大澤委員

アプローチしてもだめな人間はだめですよ。ほんとにだめな人間はね。

#### 久保副委員長

そういうのはもうしょうがないですよ。

#### 大澤委員

だからやっぱりいま大久保さんが難しくないと言いましたけど、なかなか難しいですね。(?)

#### 池口委員

そういう話しても絶対来ませんもん。それと同じですよ。芸術ったっておんなじ。

#### 大澤委員

それはとりあえず、その先に何かをきっかけに、ていうことはあるかもしれないですけど、

#### 池口委員

そうそう。だから、いいんですよ。情報さえ送れば。

#### 事務局（小林）

すいません。その、関心がない人を引き上げるということなのですが、無理矢理に高いところに、おーいあなたも芸術文化好きになってくださいということではありません。どのように表現したらいいのでしょうか。例えばその関心がないゆえに、芸術文化なんてこの地域に必要なのではないかと、反対に回ってしまうということはよくあることです。別に、芸術文化に参加してくれなくたっていいのです。例えば、スポーツが好きならスポーツに関心をもっていただいてもいいのです。ただ、芸術文化って大事だとか、そういうことに一生懸命になっている人が小金井にいたっていいという風に思ってくれるまで、気持ちを引き上げることが、この小金井で、芸術文化で豊かなまちづくりをしていくときに大事なのではないかと。これは増田さん齊藤さん久保田さんが話し合ったことにすごくつながってくるのだと思います。ですから、無理矢理来てもらって、見て、分かってもらおうということではなくて、芸術文化に予算を割くのなら、芸術文化よりもこちらの方が大事なのではないかといった人たちに対しても、芸術文化の社会的価値を認めてもらうという程

度だと思えます。

#### **池口委員**

それは全然同感です。

#### **事務局（小林）**

すいません少し長くなりますが、さきほど大久保さんが大阪府の橋下知事の問題を出されましたし、たとえば滋賀県においてもびわ湖ホールという、全国的にも認められる活動をしているようなホールが、やはり芸術文化なんて一部の人がだけが見ているのだから要らない、そんなものは閉めて、そのお金を、福祉にまわそうという話が持ち上がったわけです。それこそまた福祉なのですが、そういうことが問題になるようになってきました。しかし、文化も、芸術文化も私たちの生活や生き方の中で必要だということを理解してもらおうための施策や活動は大事なのではないかと思っています。

#### **池口委員**

大久保さんがそういう意味でおっしゃったの。

#### **大久保委員**

まあ、そう。

（笑い）

#### **池口委員**

私はそういう。そう、ベースには絶対それは当然あるんですよ。ごめんなさい。

#### **久保副委員長**

ありがとうございます。ちょっと、いつも名残惜しいというか、これからっていう感じの時間に終わってしまうんですけども、ちょっと時間ももう限られてきてますので、次に市民講座の準備状況について事務局からの説明をお願いしたいと思います。

#### **事務局（佐藤）**

はい。時間が無いので。お手元に半分のが来てると思うんですが、これで今、簡単に説明だけさせていただこうと思いますが、今まで市民講座をやるといってこっちのチラシを皆さんにお送りしたと思うんですが、これは5月2日から募集を開始しまして、一週間ほどで定員は満了となりました。実はそのあとも結構申し込みが相次いでいて、鈴木さんと分担して申し込みを受け付けてたんですが、実際キャンセルでもいいから入りたいたいという

人が10人くらい残っているので、結構反響は大きかったということがあります。でまあこれはいちおう来週から、6月6日からここで始まる予定です。この半分の紙のお話になるんですが、いちおうこの講座っていうのはしめ切ったということで、やっているんですが、やはり、これほど関心をもってくださっているということなので、講座のことを外に発信していったり、参加できない人もなんかこう知ることができるシステムを作れないかなということで、いちおうこのブログと文庫というものを考えてやってるんですが、あの、ブログはほんとにインターネットのサイトで、今事務局の方でいろいろその、情報の問題が出ていて、それを解決する手段ということで、フリーペーパーであったりとか、なんかそういうものをいろいろ集めていまして、そのちょっと紹介というものをサイトでやっているということ。と、あとほかにもいろいろ雑誌の紹介であったりとか、あと、受講した人が、やはり自分やっぱり書きたいと言ったときに、こういうところ書くのありますよっていうことをいろいろ、情報提供できたらいいな、ということで、そういう情報なんかも集めています。で、これはいちおうその発信、をしていくっていうことと、あとはまあ受講生にとっても、いろんな情報があった方が、自分がこう、やっていく中で参照できるものがあると思うので、その情報収集というのをやっています。と、最後にこの文庫というのは、いちおう講師の方々にいろいろ文献を出してもらったりしたんですが、まあそれをちょっと講座内だけでやるのはもったいないということで、こういう本がありますよ、っていうのを、講座の外の人にもいろいろこう紹介していけたらいいなということで、これはまだそれほど具体化してないんですが、まあそういう方向で、自然体にもいろいろと還元していこうかな、ということを考えています。というところで以上なんですけど、あ、そう、講座、いちおう申し込みの方の半分が小金井の方に参加してくださっています。で、もう半分は都内の人であったりとか、あと年代も20代から50代、まだ年齢のわからない人も何人かいるんですが、基本的に、いろんなタイプの方が入ってくる講座になってくると思うので、まあこれから、また始まったらご報告させていただいて、と思います。っていうことで以上なんですけど、なにか、質問、あれば。はい、以上です。

#### **久保副委員長**

はい。ありがとうございます。今日ちょっと私的には障害者とかその辺の話がもうちょっとできて良かったかな一っていう感想をもったんですけど。はい、次回の日程を確認しておきたいと思います。次回は6月25日水曜日の7時からとなります。次回のテーマは「場所」についてです。同じように意見を出していただこうと思っております。資料については本日お配りしておりますので、目を通していただければと思います。はい、最後にそのほか事務局から、ご連絡は。

#### **事務局（中村）**

はい、こちらの資料のほうなんですけど、場所の部分が、量が他と比べて少ない、と思うん

ですよ。でも、今日のお話でもすごくその、発表ですとかその(?)ですとか、今日の話でもまたつなげられる部分もあると思いますし、あと情報の話をしていたときも、(???)が大切だよねっていうお話が出てきたと思うので、この表に、書いてないことでも、場所の問題として議論できることたくさんあると思うので、これまでの話の部分ともリンクさせていっていただきたいっていうのと、が一点、後もう一点は、今の話についてもそうですし、情報の話についてもそうですし、ここに書いてないことで思いついたんだけどってことがあれば、いつでも、事務局の方に(???)言って下されば、こちらの方で受け取れますので、何か思いついたら是非いつでもご意見のほうお寄せください。

#### **大久保委員**

それから予習は何をやってくればいいんですか？

#### **斎藤委員**

宿題？

#### **大久保委員**

宿題を何か。

#### **事務局（中村）**

考えてきていただけるだけでも。

#### **事務局（小林）**

進め方は本日と同じようにやりますので、少し考えてきていただけるのが大事かと思いません。

#### **久保副委員長**

はい。では他に、よろしいですか。これで第8回小金井市芸術文化振興計画策定委員会を終了いたします。ありがとうございました。